

茅葺き屋根を葺く植物について

川上 香（江戸東京たてもの園）

Plants made of a thatched roof

Kaori Kawakami, Edo-Tokyo Open Air Architectural Museum

茅葺き屋根に葺かれる植物はススキの他、スゲ、チガヤ、ヨシなどがみられる。今回、江戸東京たてもの園に収蔵されている民家、天明家ではヨシによる屋根の葺き替えが行われた。その際、屋根葺きを担当された宮城県石巻市の茅葺職の方より、植物と屋根についてご教示を得た。以下、備忘的メモとしてまとめてみる。

1. ヨシの調達

ヨシはイネ科の多年生植物で、河川や湖などの水辺に生育する。3～4月に新芽を出し、10～12月に稲穂のような淡紫色の穂をつける（西川嘉廣 2004）。

今回の屋根葺きに使用されたヨシは、宮城県石巻市産の、北上川の汽水域に生育していたもので、平成24年、25年の冬に刈り、乾燥させたものである。現在、生育地は700町歩ほどであるが、平成23年の東日本大震災で津波に襲われ、その3分の1は刈ることができなくなったという。

かつて、北上川のヨシ原は、集落の全員が参加する契約講により管理され、刈り取りのルール決めや、屋根材用ヨシの分配、海苔簀用に売却されたヨシの収入の分配などが行われた（黒田暁 2010）。戦後、東北地方からの出稼ぎ、茅葺屋根の減少などから、集落によるヨシ刈りが下火となり、現在は、屋根葺き職の方が所属する会社が、国土交通省へのヨシの利用申請や、ヨシの手入れ、刈り取り等を行っている。

2. 茅葺き屋根の葺き材の特徴

茅葺き屋根は、時間が経つと水分によって屋根の表面の劣化がすすみ、修理が必要となる。このため、水分を早く屋根から落とし、屋根を

乾燥させることが、屋根の持ちを決める。この点を中心に、屋根葺き材となる植物の特徴を聞いた。

①ヨシ

屋根葺き材の中では最も丈夫で、屋根周囲の風通しが良ければ20～30年は修復を必要としない。ススキが「ヤマガヤ」と呼ばれることにに対し、ヨシは「ハマガヤ」と呼ばれる。平野部の河川でもヨシは生育するが、屋根にするヨシは汽水域の塩分の入ったものでなければ、屋根材にふさわしい硬さがないのだという（湖沼のヨシを使う地域もある）。

ススキとちがい、節が少なく葉が残らない。茎がストロー状なので水を通し、また隣り合ったヨシ同士が隙間の水を持ち上げるため、雨をより早く落とすことができる。

②ススキ

屋根葺き材として一番多く利用されている。青いうちに刈られるものは弱い。3月から4月に刈られるものを「スゴロガヤ」といい、普通のススキの4割増しの強さになるという。ススキは茎の中に綿があるので水を吸う。このためヨシよりは、やや屋根の耐久性が短い。

③コムギ・イネ

ヨシ、ススキに比べ屋根材としては水に弱く腐りやすい。すべてコムギ藁で葺いた場合は5～7年、イネの藁で葺いた場合は5年程度の耐久性となる。コムギ藁のほうがイネの藁より硬いので、ガギ（がんぎ）で叩くことができ、葺きやすい。

3. 農と茅葺き

茅葺き屋根が多かった頃は、「身近にある材料を屋根に上げた」ものだという。その利用は地域で異なる。例えば東北地方では、イネの栽培によりイネの藁が身近にあったが、縄や藁製品に利用するので、イネの藁は屋根に上げず、大麻の皮をむいたオガラで屋根を葺いたり、ヨシで葺いたりしたという。また林業が盛んであった青梅では、スギを木材にする際に出るスギ皮が大量にあったために、カヤとスギ皮を交互に葺き、一見すると縞模様に見える「トラ葺き」という葺き方がある（スギ皮は水分を吸収するので、スギ皮の下のカヤに水を通さない）。

さて、武蔵野台地ではムギやオカボの栽培が盛んであった。北多摩の農家のご教示によると、畑と雑木林が多かったので、あまりススキは見かけなかったという。ススキを調達するカヤバが北多摩にどれほどあったかは未調査である。また、どれほどのススキの量が屋根葺きに利用されたかも不明である。多くの農家は、栽培したコムギ藁を屋根葺きに利用した。

現在の東久留米市柳窪で、江戸時代に見出されたとされる柳久保小麦は、稈が長く丈夫であったことから、屋根葺きに重宝され、また味も良かったので広く栽培されるようになったと言われる。今回、茅葺職の方に柳久保小麦が葺かれた屋根の軒部分の写真をご覧いただいたところ、色の違いから、コムギ藁は軒と屋根の表面部の間に挟まるような中間部に葺かれているのではないかとご教示いただいた。

おそらく貴重であったススキは、美しさと丈夫さが求められる軒と、雨にあたりやすい表面部分に使い、中間には増量材としてコムギ藁が使用されたものと思われる。

さらには、やはり色のちがいがから中間部分にはコムギ藁だけでなく、オカボ藁も混じっているかもしれないとのことであった。もともと、ススキだけ、ヨシだけで葺く屋根は多くはなく、軒づけと呼ばれる軒から屋根を葺き始める部分には、その後の葺き作業で載せていく屋根材を支えるため、滑りにくく、やや潰れるような材を入れたほうが葺きやすいとのことである。ヨ

シであれば、ウラガヤという穂先近くのやわらかい部分を1メートルほど切ったものが滑り止めに使われる。コムギ藁はこの屋根材を支えるような増量材であった。

安藤邦廣（2004）によれば、栽培により調達できるコムギ藁は、耐久性が低くても大量にあるため、毎年のように短い周期で屋根の傷んだ部分を直し、その藁を肥料とした。古い藁は適度に朽ちている上、囲炉裏からのススを吸っているため肥料にうってつけだったのだという。

4. その他の材料

屋根の下組みや、棟のまわりにはマダケが利用される。マダケは3年以上のもので、タケが水を吸い上げない、晩秋から2月くらいに伐採したものが使われる。この期間に伐採したものは強度があり、中でも二十四節気の大寒の期間に伐採したものが最も強く、虫害もない。

軒づけ後、カヤを抑えるタケをオシボコダケと呼ぶが、このタケとカヤを結びつける部分にだけは、イネの藁縄よりも耐久性のある麻縄が利用される。

また、イネの藁縄はカヤ、下組みのタケを結ぶのに利用されるが、かつてのイネの縄に比べると、いまの縄の強度は十分の一くらいに感じられるとのことである。かつてイネの藁縄は、イネを木槌で叩き、やわらかくして縄ないをされたものであったが、近年では、収穫時にローラーで潰されるだけで叩きが足りないためである。叩き藁がそもそも少なく、また、叩き藁の縄は高価なものとなっている。

5. 天明家の屋根葺き材

今回葺き替えを行った天明家は、大田区鶴の木から移築されたものである。天明家は、多摩川から分水した六郷用水が、すぐ近くに流れていた。鶴の木の農業は、ムギ栽培と野菜が主体で、多摩川の河原ではゴボウが栽培された。同区の海岸部では海苔栽培が盛んで、大森では8月に海苔簀をつくるためのヨシ刈りを行った（江戸川・利根川）という（大田区教育委員会1977）。

修理前にヨシで葺かれていたことにならない、今回はヨシで葺き替えを行ったが、創建当初の江戸後期の天明家の屋根はどんな植物で葺かれていたのか。コムギ藁を増量材とし、多摩川のヨシを軒づけや表層部に葺いていたか、または多摩川の土手に生えたススキをためておいて葺いたのか。今となっては推測の域を出ない。

聞き取り

インフォーマント

宮城県石巻市、茅葺職、Tさん

引用文献

『茅葺きの民俗学』安藤邦廣、2004（新装版）、はる書房
『ヨシの文化史』西川嘉廣、2004、サンライズ出版
「半栽培から引き出される資源管理の持続性－宮城県北上川河口地域における人々とヨシ原のかかわりから－」黒田暁、2010、『サステイナビリティ研究1』法政大学
『古老聞書』大田区の文化財第十三集、大田区教育委員会、1977